

読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究（４）

— 「いいところ見つけ交流活動」の活性化—

A Study on Methods and Techniques of Instruction for the Improvement of Reading-Comprehension Literacy (4)

— Activation of learning activities to find the best of others —

次世代教育学部教育経営学科

伊崎 一夫

ISAKI, Kazuo

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：PISA型読解力，論理的思考力，新学習指導要領，自分の考え，POP作り

Abstract：The purpose of this study is to determine the “activities to find the best of others.” Improving teaching ideas ensures the creation of required PISA type reading comprehension “my thoughts,” and verifies its effectiveness. PISA type reading comprehension is determined on the basis of language activities, attitudes, positive attitudes depending on the purpose. The guidance case addressed in this study shows the core activity in which students make POP. The learning activities, the two evaluation activities, and artifacts representation of their own POP come to evaluation activities to learn the goodness of making POP of others. This paper confirms the effectiveness of the “activities to find the best of others” in the creation.

Keywords：PISA type “Reading comprehension”, Logical thinking, New course of study, Original idea, Making POP

1. PISA2009の課題と「言語活動の充実」

OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2009年度調査の結果が平成22（2010）年12月7日に発表された。その結果に対して文部科学省は、「読解力を中心に我が国の生徒の学力は改善傾向にある。しかしながら、トップレベルの国々と比べると下位層が多い。」と総括し、読解力については、「必要な情報を見つけ出し取り出すことは得意だが、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすることがやや苦手である。」と分析している。

PISA2009における「読解力」の定義は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力」となり、末尾の「これに取り組む能力」が新たに加えられた。読解力はただ単に読む知識や技能があるというだ

けでなく、様々な目的のために読みを価値付けたり、用いたりする能力によっても構成されるという考え方から、「読みへの取り組み」（engaging with written texts）という要素が加えられた。つまり、読むことに対してモチベーション（動機付け）があり、読むことに対する興味・関心があり、読むことを楽しみと感じており、読む内容を精査したり、読むことの社会的側面に関わったり、読むことを多面的にまた頻繁に行っているなどの情緒的、行動的特性が強調されている。

このことに伴い、PISA型読解力の3側面は、〈情報へのアクセス・取り出し〉〈統合・解釈〉〈熟考・評価〉と若干の修正が加えられている。しかし、PISA型読解力の内実が大きく変化したわけではなく、「情報の関係性を理解して解釈することや、自らの知識や経験と結び付けたりすることに課題がある」という実態が大きく改善されたわけではない。

PISA型読解力は、従来から一貫して、単に言語活動を行えばよい、というわけではなく、目的に応じてより積極的で自覚的な態度・姿勢に基づく言語活動を求めてきた。その意図は、PISA2009においてより鮮明になった。「目的に応じてより積極的で自覚的な態度・姿勢に基づく言語活動」を行うためには、実生活の場において自ら積極的に他者に働きかけることが大切になる。だから新学習指導要領・新国語科の「伝え合う力」においては「相互に思考を深めたりまとめたりしながら解決していく能力」が重視された。「相互に思考を深めたりまとめたりしながら解決していく能力」は、知識を活用して何らかの課題を解決する問題解決のリテラシーである。

リテラシー（literacy）とは、もともとは「読み・書き・計算」能力を意味する言葉であった。しかし高度に情報技術が発達した現代では、「識字」といった域を超えて、情報を「活用する能力」という意味が強調されるようになった。PISA型読解力は、こうした情報活用能力を内包した「リーディング・リテラシー」である。単に情報を「読み取る」という入力だけではなく、情報を「発信する」という出力、さらにそうした情報のやりとりがどのようなものであったかを「熟考・評価する」ことまでを含んでいる。

「問題解決」の典型的なプロセスと「リーディング・リテラシー」との関連については、一般的に次のように整理されることが多い。

【図表】問題解決プロセスと求められるリテラシーとの関係

問題解決プロセス	求められるリテラシー
①情報を収集する	・情報収集手段の選択 ・情報の取捨選択
②情報を分析する	・客観的な情報の読み取り ・情報の批判的な吟味
③問題を発見する	・隠れた原因、問題の発見 ・課題の絞り込み
④解決策を構想する	・可能な解決策の選択 ・問題解決までの計画
⑤解決策を共有する	・相手に即した的確な表現 ・表現の検証、評価
⑥問題を解決する	・実施中の軌道修正 ・実施後の評価

「問題解決プロセス」のどのプロセスにおいても、他者との関わりが不可欠となる。「一人で」「独自に」

と同時に、考えや立場の異なる相手と協同してコミュニケーションを行い、課題解決や合意形成を行い、人間関係形成を実現する能力・態度の育成が強く求められているということである。そのために、新学習指導要領・新国語科は、三領域ともに「交流に関する指導事項」を位置づけた。互いの考えの共通点や相違点を考えながら、論理的に思考を広げたり深めたりする学習指導を積極的に行う必要を主張している。この点においても、PISA型読解力と新学習指導要領が重視する「言語活動の充実」は表裏一体の関係であり、「言語活動の充実」は「交流に関する指導事項」が機能するかどうかにかねらわれている。

2. PISA型読解力と「自分の考え」

PISA型読解力においては、読解力の3側面のそれぞれに、レベル1未満～レベル5までの6段階のレベルが設定されている。例えば、各側面の「レベル3」と「レベル4」は、それぞれ次のようになっている。

〈情報へのアクセス・取り出し〉
「レベル3」
複数の情報を結びつけることができる
「レベル4」
複雑に埋め込まれた情報を取り出すことができる
〈「統合・解釈」〉
「レベル3」
テキストの部分と部分の関係を明らかにすることができる
「レベル4」
言葉のニュアンスを読みとることができる
〈「熟考・評価」〉
「レベル3」
複数の情報などを身近で日常的な知識と結びつけることができる
「レベル4」
テキストを批判的に評価することができる

PISA型読解力の3側面が充実することによって、「書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力」は培われる。PISA型読解力を高めるためには、テキストを肯定的にとらえて論理的に理解する（情報へのアクセス・取り出し）だけでなく、テキストの内容や書き手の意図など関係性を理解し、論理的に解釈する（統合・解釈）が必要である。さらに、そのテキストについて、内容や表現を吟味・検討し、自分の知識や経験と結びつけて考えを論理的にまとめたりする力（熟考・評価）を育成することが重要となる。読解力の3側面の充実のためは、論理的思考力が不可欠である。このことは説明文教材に限ら

ず、むしろ文学教材の読解において意味を持つ。

PISA型読解力は、情報のインプットからアウトプットまでの一連の論理的な思考操作を要求する。だからこそ、情報のアウトプットとなる「読んだこと」について、根拠を明確にしながら、論理的に自分の考え・意見を述べること」という「自分の考え」を論述することが不可欠となるのである。PISA型読解力が攻める読み、アクティブな読みといわれる所以である。目的意識を持って、主体的に読むことや読んだことに対する自分の意見や考えを表出することの重視は、文学教材の読解においても不可欠となる。

PISA型読解力に設定されている各側面のレベルに示されている内容は、新学習指導要領の指導事項に近似している。PISA型読解力が求める「自分の考え」に関連する指導事項は、以下のように、新学習指導要領の「B書くこと」「C読むこと」において頻出する。

◎「B書くこと」に示されている「自分の考え」
(下線伊崎)

【構成に関する指導事項】

○第1学年及び第2学年のイ

自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考へること。

○第3学年及び第4学年のイ

文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。

○第5学年及び第6学年のイ

自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考へること。

◎「C読むこと」に示されている「自分の考え」
(下線伊崎)

【説明的な文章の解釈に関する指導事項】

○第5学年及び第6学年のウ

目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さへ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。

【文学的な文章の解釈に関する指導事項】

○第5学年及び第6学年のエ

登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。

【自分の考えの形成及び交流に関する指導事項】

○第1学年及び第2学年のオ

文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。

○第3学年及び第4学年のオ

文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。

○第5学年及び第6学年のオ

本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること

国語科の指導事項は、各領域共に課題解決過程をふまえた順序で構成されており、その過程の中に、PISA型読解力の3側面である〈情報へのアクセス・取り出し〉〈統合・解釈し〉〈熟考・評価〉が内包されている。つまり、目的に応じて選んだテキストやその他の資料を読み、テキストの種類や特性に応じて観点を決めて情報を取り出し、自らの知識や経験と結びつけ統合・解釈し、自分の考えや意見としてまとめ上げ、それらを互いに交流することによって熟考・評価するというプロセスになっている。

国語科に求められている「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成」は「自分の考え」として統括されており、PISA型読解力における「自分の考え」を論述することと、同一線上に位置付けている。つまり「自分の考え」に向けて学習活動は調整される必要があるということである。そのとき「交流に関する指導事項」が重要な役割を果たすことになる。

3. 「自分の考え」と「交流に関する指導事項」

それでは、どのように「交流に関する指導事項」を具現化すれば妥当性のある「自分の考え」を持つことができるのだろうか。PISA型読解力の3側面をふまえれば、それぞれの領域における言語行為を単なる学習活動として行えば良いというのではなく、その言語行為の内実となる内容価値、いわゆるなかみを伴った評価意識や言語行為となることが不可欠であることは自明である。その評価意識や言語行為を支える言語力が「交流に関する指導事項」である。

「交流に関する指導事項」は、次のように示されている。(下線伊崎)

【A話すこと・聞くこと】

……課題解決や合意形成を目指して、お互いの意見や考えを交流し合う

○第1学年及び第2学年

オ 互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うこと。

○第3学年及び第4学年

オ 互いの考えの共通点や相違点を考え、司会や提案などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合うこと。

○第5学年及び第6学年

オ 互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。

【B書くこと】

……指導事項に示された書く能力を観点として、表現物の良さについて意見や感想を交流し合う

○第1学年及び第2学年

オ 書いたものを読み合い、よいところを見付けて感想を伝え合うこと。

- 第3学年及び第4学年
カ 書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。
- 第5学年及び第6学年
カ 書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。
- 「C読むこと」
……文章と自分の考えを結びつけて、考えたことを交流し合う
- 第1学年及び第2学年
オ 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。
- 第3学年及び第4学年
オ 文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。
- 第5学年及び第6学年
オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。

こうした「交流に関する指導事項」を具現化するときには、何を観点として評価するのを明らかにする必要がある。例えば、「B書くこと」領域、第5学年及び第6学年のカ「書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと」に示されている「表現の仕方」であれば、「B書くこと」のア～オまでの指導事項に示された各能力を観点とした評価意識や方法が求められるということである。指導者のねらいと学習者の評価意識や方法が無理なく一致する指導の工夫が求められる。この学習指導の工夫改善として、学習者がそれまでに学んだ書くことに関する能力を観点として活用する「いいところ見つけ交流活動」が有効である。

「いいところ見つけ交流活動」に関する直接的な表現は、「B書くこと」の低学年の中に、書いたもののよいところを見付けて感想を伝え合うこと」である。しかし、「交流に関する指導事項」の中の、「互いの考えの共通点や相違点」「互いの立場や意図」「書き手の考えの明確さ」「表現の仕方」「自分の思いや考え」「一人一人の感じ方」「自分考えを広げたり深めたりする」などの中には必ず「いいところ」、独自性が含まれている。つまり、「いいところ見つけ交流活動」は、全ての領域において可能であり、またその内実が求められる。その基本的な方略は、学習者における既習の学びを抽出し、観点表として整理することである。

各領域の学習活動にふさわしい表現成果をお互いに交流するとき、観点表があれば、その独自性を見つけ合い、認め合うことが可能となる。自分の独自性は、自分だけでは見極めにくい。観点表に基づく「いいところ見つけ」という積極的に他者の目をくぐる方策に

よって、自分の考えや考え方に関する良さが、自覚でき、言葉の力をより意図的に身に付けることができるのである。同時に観点表は、「自分の考え」の表出を促し、その質的な内容を担保することにも大きく寄与する。

4. 「いいところ見つけ交流活動」の具体化となる学習指導の実例

「いいところ見つけ交流活動」は、「自分の考え」の表出を促し、その質的な内容を担保する点において、その学習指導の工夫改善は、国語科の学習活動の全てにおいて求められよう。ここでは、その工夫改善の一例として、小学校5年生における「POP作り」を中核に据えた学習活動（「作品の良さをポップで紹介しよう」－主教材名「大造じいさんとがん」（東書5年下）－）を取り上げ、「いいところ見つけ交流活動」の有効性に関する分析を行う。

本単元の主教材である「大造じいさんとがん」は、動物と人間のかかわりをえがいた物語である。起承転結の場面構成が分かりやすい、大造じいさんの心情が会話文や地の文に直接表現されているだけではなく情景描写にも暗示されているといった特徴を持っている。こうした表現上の工夫によって、子どもたちは大造じいさんの残雪への気持ちの変化を読み取り、自分なりの感想を持つことができる。作品の持つ良さを他者に紹介する力を高めていくために適した教材文であるといえる。さらに、テーマ読書へと学習を発展させ、お互いの考えを交流することによって、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

本単元の主たる言語活動は、POP作りによる本の紹介活動である。ポップの項目は、作品名、作者名に加えて、キャッチコピー、作品のあらすじやおすすめの場面とその理由、イラストなどである。POP作りによって、作品を叙述をふまえて読み抜くことに加えて、自分の考えを焦点化し効果的に表現する言語活動を行うことが可能となる。「付けたい言葉の力」は、第5学年及び第6学年の「文学的な文章の解釈に関する指導事項」である「エ 登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること」である。

「いいところ見つけ交流活動」は、「(1) POP制作者自身の表現成果物を主たる素材とする評価活動」と「(2) 他者のPOP作りの良さに学ぶ評価活動」の2つの学習活動によって構成される。「(1) POP制作者自身の表現成果物を主たる素材とする評価活動」

は、POP制作者による自己評価活動と、小グループによる相互評価活動とが組み合わされている。「(2) 他者のPOP作りの良さに学ぶ評価活動」は、学習者が友だちのPOPからお気に入りの作品を選び、その良さを見極め、作品そのものの読解活動に立ち戻ることによって、より吟味された「自分の考え」を表出することにねらいがある。

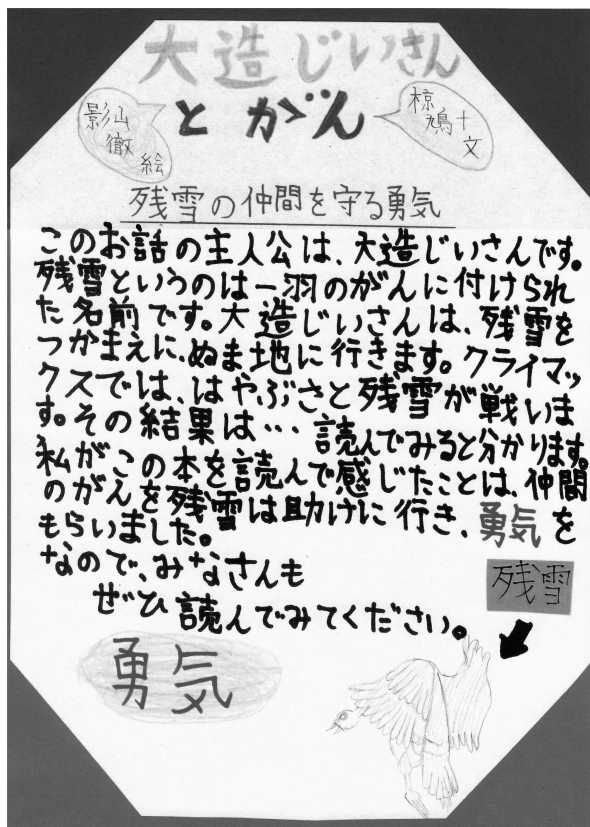
資料①は、第2次において、学習者が優れた叙述について自分の考えをまとめ、作品の良さを紹介するために書かれたPOPである。POPには、資料②のような「POP制作の意図」が添えられる。資料②に添えられている「POP名人への道－5年3組流・情報伝達のワザ－」が、「いいところ見つけ交流活動」における観点表である。観点表が「POP制作の意図」に添えられているところに、この学習活動の特質がある。つまり、観点表は、「自分の考え」となる「表現内容と方法の工夫を促すヒント」として機能する。「大造じいさんとがん」のどこに目を向け、何を読み取り、読み抜き、自分なりの感想や考えを生み出せば良いのか、その手続きを円滑に進める手助けになる。

I 児は、この作品のテーマを「勇気」をキーワードとしてとらえようとしている。その根拠を作品のクライマックスに求めた。そうした自分なりの読み取りの内容や手続きを「POP制作の意図」は示している。POPという表現成果物に「POP制作の意図」が添えられることによって、POP制作者の表現意図が自覚されることと、他者による「いいところ見つけ」の方向が調整される。

次頁以降に示した資料③、資料④は、「いいところ見つけ交流活動」の「(1) POP制作者自身の表現成果物を主たる素材とする評価活動」と「(2) 他者のPOP作りの良さに学ぶ評価活動」において用いたワークシートである。

前述したように、「(1) POP制作者自身の表現成果物を主たる素材とする評価活動」(資料③)には、POP制作者による自己評価活動(ワークシート上部)と、小グループによる相互評価活動(ワークシート下部)が組み合わされている。

【資料①】POP例 (I 児)



【資料②】「POP制作の意図」(I 児)

今回のPOPは……
5年3組 [4] 番 [I・A] 7/16

作品名	大造じいさんとがん
著者名	栗九島十
出版社名	教科書

このPOPの制作の意図は……(箇条書きで3点)

- ① 勇気という言葉がキャッチコピーにして、相手に伝えようとして、強調している。
- ② クライマックスの所をすごく気になるようにして、相手を引きつけている。
- ③ 一番伝えたいことを初めに伝えようとして、初めに書いている所。

POP名人への道－5年3組流・情報伝達のワザ－

平成20年度 5年3組 08-07月版

I 書かねばならない「オリジナル」な情報を作り出すためのワザ

- A 客観情報を読み解く！
- ① 設定 (SWTH) は？
 - ② 設定の特徴は？
 - ③ 主な出来事・事件は？
 - ④ オープニングとエンディングを比較する
 - ⑤ エンディングに注目する
- B 主観情報を生み出す！
- ① 作品の雰囲気を感じる
 - ② テーマを見極める
 - ③ 感想から、意見・主張へと

II 伝えなければならない情報を「効果的に」伝えるためのワザ

- A 言葉や文
- ① 一文を短く
 - ② キャッチコピーを
 - ③ 問いかけるように
- B ビジュアル
- ① イラスト
 - ② 図やグラフ
 - ③ 色づかいや飾り
 - ④ 字の大きさ
- C ピンポイント
- ① 数値や量を使う
 - ② ランキング
 - ③ 箇条書き
 - ④ クイズ形式

【資料③】「(1) POP制作者自身の表現成果物を主たる素材とする評価活動」例 (I 児)

私のPOPの「いいところ」を見つけよう 5年[3]組[4]番 名前[I・A] [7/19]

フライマックスが一番目立つところなので、そこをつまみかきになるようにしている

一番目立たせて伝えたいことを書いている

最初に伝えたいことを最初に書いて最初に伝えようとしている

POPを書いた作品は……

作品名 [大造いいさんとがん]

作者名 [椋 鳩十]

出版社 [教科書]

私のPOPの「いいところ」は……

①お話のあらましは……

大造いいさんが残雪をつかまねにぬま地に行き、そしたらはやぶさ
と残雪が戦うお話です。

②POPで伝えたかったことは……

残雪の仲間を守る勇気をみんなにも、持てほしいということ
です。残雪は仲間のことを思って守っているということです。

③POPの伝え方の工夫は……

残雪の仲間を守る勇気ということを書き、最初に書き、最初に伝えよう
としていることが伝え方の工夫です。

④私のPOPの「いいところ」は……

キャッチフレーズを書いて、強調し相手に一番に伝えようとしている所
が、いい所です。

あなたのPOPは	① [10] 番 [K・R] より
ここが素晴らしい!!	その「わけ・理由・根拠」は……
題名の下にキャッチ フレーズしている	題名の下に早くキャッチフレーズをペンで自立 たして書いているのがいいと思います。
あなたのPOPは	② [19] 番 [T・S] より
ここが素晴らしい!!	その「わけ・理由・根拠」は……
「い」	その結果は…とかいってるのでとても気になる ようにしているのがとても好きです。
あなたのPOPは	③ [25] 番 [N・K] より
ここが素晴らしい!!	その「わけ・理由・根拠」は……
大きく感じたことを 書いています	「勇気」と下の方に書いていて強調されて いることを自分で気づいているからです

友だちからのコメントを読ませてもらって…… (私が気づいた私の良さば!!) I・A]

キャッチフレーズを最初に書き、相手を引きつけているということがいい工夫だ
ということがわかりました。

【資料④】「(2) 他者のPOP作りの良さに学ぶ評価活動」例 (I 児)

友だちのPOPの「いいところ」を見つけ 5年[3]組[4]番名前[

I・A

7/17

私が選んだ友だちのPOPは

K・R]さんの作品です。

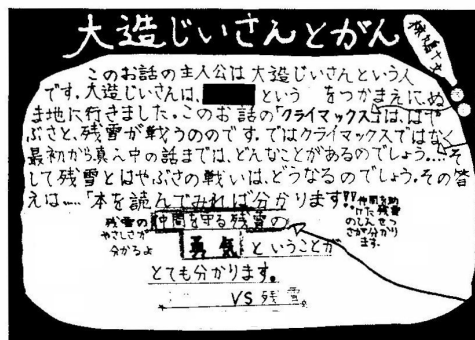
そのPOPは……

作品名 [大造じいさんとがん]

作者名 [椋 鳩十]

出版社 [教科書]

友だちのPOPの「いいところ」は……



カラフルにして、重要な所をき立てている

つづきをつなげるようにして、お話を引きつづける

大切な戸所をいろえんぴつで目立たせている

A-①このPOPで [K・R] さんが伝えなかったことは……

残雪のように仲間を守る勇気があるということ、残雪の仲間を思つやさしさが分かるということ、仲間を助ける残雪のしんせつさということをお伝えしたかったと思います。

A-② [K・R] さんのPOPの伝え方の工夫の「いいところ」は……

すごく大切な所をいろえんぴつで「口」形にカラフルにして目立たせて相手にすぐ伝えようとしていること、内容の重要な所を強調して相手に伝えているのがいいと思います。

A-③ [近藤] さんのPOPを読んで、私がこの作品について、新たに気づいたことは……

はやりさと残雪のふき出しに、勇気以外の言葉が書いてあり、お時にこの本にはいろいろなことが感じるといふことを思ってもらい、相手を引つけているということです。

B 次に私がPOPを書くときに、取り入れたいと思った伝え方の工夫は……

すごく大切な所をいろえんぴつでカラフルにして相手に伝わるように目立たせるといふこと、内容の所からも重要な所を少し目立たせるとお時により伝わるのでそうしたいと思います。

C もう一度この作品を読み直してみよう

私の気に入りの文章は……[96]P

もう一けりとはやりさが「こうけきの姿勢をとったとき、さと、大きなけが空を横切りました。

その「わけ・理由・根拠」は……

仲間のがさがやりそうになった戸所を横切るということは、仲間のやさしさということがよく伝わるからということ、仲間を守る勇気があるということともう一つは、仲間を守るしんせつさといふことのよく伝わる文だから伝えました。

POP制作者による自己評価活動においては、表現成果物の良さを学習者自身が吹き出しを用いて書き込むことや、「②POPで伝えなかったこと」「③POPの伝え方の工夫」「④POPの良い点」を文章で記述することを行っている。「自分の考え」を生み出すために行われた作品との対話を、POPという表現成果物を客観的に見直すことによって振りかえることができる。「自分の考え」のメタ認知を行うことにもなる。

POP制作者であるI児の意図をふまえて、K児、T児、N児の3名の学習者が、I児のPOPの良さを理由と共に伝えることを行う。それらのコメントを読み、I児がさらに「私が気づいた私の良さは……」という指示に従う形で、自分自身の取り組みの内容や方法の良さを出力する。「自分の考え」のメタ認知が強化される仕組みとなっている。

資料④は、「(2) 他者のPOP作りの良さに学ぶ評価活動」を行うワークシートである。I児はK児のPOPを選択し、K児の伝えなかったこととその伝え方の良さを探っている。

このワークシートのポイントの一つ目は、「A-③」の友だちのPOPを通して、この作品に関する新たに気づきを出力する項目にある。I児が「自分の考え」を生み出すために用いた「勇気」に加えて、K児の「仲間を守る」という言葉とが組み合わせられていくことによって、I児の読みは深化する。

このワークシートのポイントの二つ目は、K児のPOPの良さの見極めの結果得られた成果を、ワークシートの「Cもう一度この作品を読み直してみよう」において、お気に入りの叙述とその理由として、表出させることによって、I児の「自分の考え」は補強され、より独自性の高いものへと変容する。

5. おわりに

「大造じいさんとがん」(小学校5年生)のPOP作りと、その「いいところ見つけ交流活動」において、「自分の考え」の生成が効果的に行われたことを確認してきた。

PISA型読解力は、目的に応じてより積極的に自覚的な態度・姿勢に基づく言語活動を求める。単に情報を「読み取る」という入力だけではなく、情報を「発信する」という出力、さらにそうした情報のやりとりがどのようなものであったかを「熟考・評価する」ことまでを、「いいところ見つけ交流活動」は統括し、支援する。「いいところ見つけ交流活動」によって、「自分の考え」の内実は生成され、その質は保障され

るのである。

参考・引用文献

1. 伊崎一夫『国語授業へのアプローチ 知っておきたい国語教育の〈ことば〉』(日本教育総合研究所, 2012. 10)
2. 伊崎一夫『特集国語実践に学ぶ「基礎・基本習得の技能」』(日本教育総合研究所, 2012. 8)
3. 伊崎一夫『学習指導案で授業が変わる! - 学習指導案を読む・書く・使いこなす -』(日本標準, 2011. 4)
4. 伊崎一夫・阿部秀高編著『移行期からはじめる新しい国語の授業づくり』(日本標準, 2009. 4)
5. 伊崎一夫「文学教材の論理的読解のために - 「主題把握」とテキストの多様な情報を関連付けることを -」『教育フォーラム51 言語活動 - 「読む」「書く」の力を中心に』(pp. 48-58, 金子書房, 2013. 2)
6. 伊崎一夫「論理的記述力を高める」『教育フォーラム46 〈言葉の力〉を育てる』(pp. 25-35, 金子書房, 2010. 8)
7. 伊崎一夫「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究 - 読み聞かせを取り入れた読解指導 -」(環太平洋大学研究紀要第3号, pp. 43-50, 2010. 3)
8. 伊崎一夫「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(2) - 『つなぐ』思考の活性化 -」(環太平洋大学研究紀要第4号, pp. 65-71, 2011. 3)
9. 伊崎一夫「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(3) - 『さぐる思考』の活性化 -」(環太平洋大学研究紀要第5号, pp. 51-60, 2012. 3)